

# COSMOS集



酒 精 綿

伊 藤 祐 楓\*茨 城  
「あすなる集」特選

神棚に五歳の吾子と手を合わせ世界に向けて柏手鳴らす  
〈永遠〉をおさなに語る妻のいてハンガーの柄の折れし夕方  
わが心映すがごとく青白き涙にも似てはなびらの散る

古き良き時代感ずる〈酒精綿〉ずつと昔の医院の匂い  
真つ白な限定ブルーさん抱きしめて遠い異国の白夜を想う

祖 父 の 血 坂 井 寿々子\*東京

聖母マリアはもろ手ひろげて海原を迎えるごとし黒崎教会  
山深み来るひともなく濡れそぼつキリスト教の枯松神社かれまつ  
しつぽりとあゆみ行くとび雨だれのはげしくなりて枯松神社  
こもれ日がなくてこの目もくもり行く眼鏡橋にて夢うつつなり  
ロンドンとシアトルに計九年を在りし祖父の血すみずみめぐる

結界のゲート 工 藤 亜希子\*神奈川

人の世に濃淡あらむ今の世は濃く忌まわしき蘭の色に似る

結界のゲートをとうにゆき過ぎて薄靄かかる地下を歩めり  
バグ取らむと画面に向かい悩み午後オフィスは無風地帯のごとし  
ぽっかりとりモートワークを過こしおりコクーンのごとく我が部屋はあり  
春の陽に蝌蚪らは泳ぐ歌われることを待ちいる音符のように  
三つ指ついた 小 谷 優 香\*鳥 取

念入りに夫の革靴磨きあげ思わず三つ指ついたこの朝  
鎧着た三十八年帰宅せる背広の夫の手にある花束  
病気なし借金なしをただただに幸いとする還暦夫婦  
海沿いを東、東と走り来てコンビニで買う「北國新聞」  
早春の白川郷で少年が薪を割る音真つ直ぐ響く

煩 悩 の 数 白 木 佳 乃\*青 森

五月雨は睫毛の泥を洗えるか半眼開き虚空蔵菩薩  
手作りのマスク旋風「新柄のガーゼ入荷!」と張り紙が言う  
認識を塗り替えていく斑雪見えないものが闘う相手  
「コロナかも」通院患者増えている待合室に本はもう無い  
桜咲く摩訶曼荼羅華煩惱の数かも知れず人ひとり無し

黄 水 仙 古 木 増 美 岐 阜

「華かがり」「濃姫」は岐阜苺の名せめて食卓甘くやさしく  
黄水仙に呼ばれて中に隠れるる幼子見えぬふりして捜す  
露の臺摘まんと籠持ち若妻のやうに野畑をさつと駆け下る  
水仙を一語のごとくさし出せる幼の謝罪をほほみみて受く  
人の言をすべからく容れる器もつ人を思ひて梅林をゆく

春のことも 吉田真弓 北海道

クロッカス白と紫咲き揃ひ春のこどものやうなはいさ  
幼子は枝をつかむと繰り返し跳びて遊べり風と柳と  
枯れ枝を釣りぎをに見立て遊ぶ子よかうして道具は生まれたのかも

覚えたる much・many に新しき a lot of 増えて子の脳更新  
誰もぬぬ小学校の玄関に置かるる次週の課題プリント

苗を待つ 間城佐代 高知

眠りへと入りゆく時さへ纏ひつくけふの憂ひの黒き塊

コロナといふウイルスどこに潜めるや初夏の光に布団を干せり  
外出を自粛せざるを得なき日はマスク縫はむと机に向かふ  
代掻きを終へしトラクター全身に泥を纏へり夕陽の中に  
苗を待つ田んぼの水の清けさよ風が渡れば小さく波立つ

梟の妻恋い 川村秀子 奈良

住みなじみ春雨けむる丸山に丸き街灯にじんで灯る

ケケケとひねもす鳴けり野にひびくはなやぐ鳴きこえ梟の妻恋い  
ひんがしの若草山を借景に薬師寺全景ようやく見えつ  
十年の解体修理やつと終え薬師寺東塔空にかがやく  
西塔と東塔並ぶ薬師寺を大池映す よろこぶ池面

うりはだかえで 磯部剛 新潟

背低く早々に咲きしわが庭のチューリップの花怯えるごとし  
点滴の母の血管想いつつ肌着を渡すナースステーション  
山桜の淡きピンクをくぐりつつ峠をめざすマウンテンバイク

ふわつと来る甘き匂いのその先にわれを待ちおりタムシバの花  
雪を跳ね立ち上がりたる枝先に赤き芽光る瓜膚楓うりだま

ののさま如何に 中村京 兵庫

ひとしきりひばりさへづるわが町に緊急事態宣言が出る

瓶底のわづかな無水エタノールぎりぎり薄める明日のために  
人界のコロナ騒ぎのごたごたをののさま如何に思はれますか  
木蓮のミルク色した花びらをぼったん散らすみんなみの風  
マイセンの器に注ぐフレイバーティー丹の花びらがくるくる香る

黒髪山 山口芳子 佐賀

そそり立つ雄岩雌岩はその上の悲恋の秘話を今に伝ふる  
峻嶮の黒髪山の崖道に足竦みとときに立ち往生す

青年が差し伸べくれし手を借りて山頂に立つ七十二の身は  
山頂の天童岩に立ちたればはるかに烟る有明海は  
小太郎と万寿姫描く掛軸を後生大事に扱ひし妣

春呼ぶマカロン 藤本満里子 兵庫

「不要不急」「自粛」「ホームステイ」くり返す呪文のごとしテレビつければ  
時季くれば「自粛」さておき黙もくと田に水を引き畦うつらら  
色あせず音をたてずに突として一子わびすけ花を落とせり  
休校のつづく孫らの喜ぶやいろとりどりの春呼ぶマカロン  
乗客はふたりのみなり音立てて一輛電車橋をわたりぬ

空には雲雀 井上啓子 愛知

近隣の畑をまとめて買ふといふ廃プラ業者に夫は同意す

靡ブラは梱包されてうづたかく空へと積まる空には雲雀

「髪の色素敵です」と生け花の若き友より直球が来る

西日背に草引きをれば豆腐売りのらっぱの音の過ぎ行きにけり  
冬鳥は百羽二百羽群れをなし海苔粗朶越えて北へ飛び行く

鼻を近づけ 甘利 紀子 長野

密集の十二単を抜き取れば根にしがみつく蛙ごめんね

赤飯を炊きて退院祝ひせり夫の作りし花豆入れて

庭に咲くたつた四個のカタクリに寂しい春の思ひを告ぐる

満開に沿道彩る連翹に義姉の葬りの遠き日思ほゆ

沈丁花やうやく開花二つ三つ鼻を近づけ香り楽しむ

その先見たくて 北野 朋子 新潟

退職の記念に友と訪れし飛鳥の里にれんげさう咲く

広き田の彼方に並ぶ工場のかすみで見えぬ春の夕靄

その上を歩めば心地よき音をたつる木橋と子らは遊べり

アパートの物干し竿にカラフルなマスクの揺るる桜の季節

目の前の老いの坂道向かひ風その先すこし見たくて歩く

スタッフの献身 安井 和子\*広島

里山に満ちたる桜花桃をコロナ禍なれど見るはうれしき

突然のクラスターとの発表に人口五万のわが町ゆれる

看護師でありしわれにも見えて来しコロナ禍にいるスタッフの献身

元氣かと聞くもためらう感染症指定病院勤務の息子に

戸袋に網戸、ガラス戸みな納め縁広くして山桜眺む

カタクリの花咲く里にギフチョウは蜜を吸いつつふわふわ飛べり

笑顔は迫る 小笠原 美弥子\*愛媛

青空に映える桜のトンネルに思わず歩を止め深呼吸する

山なみの暗き峰より昇りくるスーパームーンに手が届きそう

土手の道行けば遮るものなくてスーパームーンの笑顔は迫る

週一度仕事の帰りに寄りくる娘は吾の味なつかしみ食む

山裾は桜咲き満ち山脈の鬚は昨夜の雪固く積む

春の土 牧野 初江 鹿児島

独り居のわれと知りてかコトコトと北風きたかぜが鳴らす寝所の雨戸

石露の茂みの中に棲むといふハブを想ひて踏み込まざりき

咲き盛るつつじの花を食みに来るはずの鴨この二日来ず

春の土裸足で踏めば思ひ出づ戦後の農は素足で為しき

洗ひたるシーツを朝の陽に干して三月十日火曜日安ら

九州の男 森下 たみ\*埼玉

帽かぶりマスクをすればわからぬとスツピンで行くお金おろしに

ペイペイと誰がつけたか安つぱい私は紙幣を数えて渡す

大食いの場面はかなし戦時中いや今もなお飢える子多くて

坂道に一瞬足を取られれば地面がわつと我に近づく

六十年良くも悪くも九州の男といわれる夫と暮らして

誰より早く 渡辺 京子 宮崎

隣家の民之助あん兄ちゃん小雨ふる弥生尽に逝きぬ隣臓癌で

「京子ちゃん」二人つ子吾をささう呼びし幼馴染の民之助兄ちゃん

葉たばこの生産日本一誇りたる国富町に生きて古りたり

煙草の葉国富町の夏空の下に茂りて収穫をまつ  
民之助兄ちゃんあにちゃんの田で育ちるし新米食みき誰より早く

影とふたりで

島 夏 樹\*宮城

からだまで葉が咲きそうなのはつ夏た終わり知らないみどりがやく  
灯を明るく親しい本を改めて読む夜更けまで影とふたりで  
高く澄み風の言葉を聴きわける晩秋の穹は大いなる耳  
限りあるこの世に老いて自ずからこころ寄りゆく「壺中の天地」  
ぴかぴかの小判は木の葉の價小判マスク一枚買えない令和

初夏の匂ひ

杉 沢 千 恵 東京

うぐひすの初音ききたり公園の桜の下を歩みたるとき



「その二集」特選

うまみ成分

高 橋 梨穂子\*新潟

灰汁がよくわからないまま掬いとるうまみ成分みたいな部分  
アイーンの動きで志村けんを指す手話がわたしに届く三月  
丁寧ていねいに続くあなたの運転に荷物になったみたいになむる  
チューリップ畑はたけにふたりこの恋を閉じこめておく言葉がほしい  
ふたり手を繋いでねむるゆつくりと筏を沖へすすめるように

穏やかに晴れたる朝あした満開のハナミズキ揺らし鶉の飛び立つ  
庭の梅緑の中を覗きみれば小さき実あまた生るるうれしさ  
桜咲くをテレビに見つつ弘前の城の辺りをなつかしむ今  
公園の藤棚の藤色づけば昼の陽ははや初夏の匂ひす

百円と一円

大宅 朋 子 佐賀

髪の毛が無いといふことこんなにも寒いものかと病得て知る  
シートベルト外さぬままに立たむとすバスの旅でのトイレ休憩  
鼻孔より灰と入りきて良く匂ふ桜落ち葉に顔を寄すれば  
七十五過ぐれば運賃が只といふバス停までは家から五キロ  
百円と一円の見分けつき難くレジでもたつき視線をあびる  
長風呂にもしやと思ひ声かけて夫の返事に坐り直せり

在宅勤務

清 水 佑太郎\*東京

朝五時に必ずワンと言う子犬スヌーズ機能で五分後にワン  
自転車で江戸川の土手登るとき電動チャリに煽られる朝  
在宅勤務 開始前日教材を十冊引き上げ腰が壊れる  
オンライン授業で分詞構文を読む生徒らの悲鳴がきこえる  
「死ぬなよ」とコロナ患者を診る友へ夕べのLINEの既読ただ待つ

さがるくる 中村 恵\*鳥取

おばあちゃんが死んだこの春いつになく肌寒い日が多い気がする  
春がくる春がさがるくるさがるくるけどさむいきててもさみしい  
黄水仙、スノーフレック大勢で頭を垂らしもと咲きおり  
ふぞろいの空きびん洗い背のたかい順に並べて見るむこうがわ  
これまでに捨てられなかった錆びつきのカンカンおいて飾る白菊

はらほろろん 内藤 丈子 福井

むらさきの音符のやうな花びらの小さきハミング堅香子の花  
手のひらにさらさら零るる春をすくひ母のかばんに詰めてゐる朝  
白蓮は光の音符を浴びて咲くはらほろろんと Rond 奏でて  
淡雪は風をはらりと濡らしゆきあなたのやうな春の月出る  
じゅんじゅんに咲くやタンポポこの星の番号ふだをもらひて  
雪国の空はしゆるしゆる溶けだして青にときめくわれの湖

見えないけれど 松井 奏\*茨城

満月を見に外に出てさむくって誰かの目線感じて帰る  
ブルボンのエリーゼのファンになりました外出自粛十日目の夜  
くそくそくそなんにもうまくいかねーよ時間だけが過ぎてもう九時  
ニュースではまた感染が広がってまじの外にある雨降りの街  
あつアプがっスケートボードに乗ってたらアプがっぶれて死んでしまった  
どこにいるコロナウイルスはそこにいる見えないけれど駅前にいる

尽力された 高橋 みどり\*愛知

電線に音符のごとき緋連雀 奏でいるのは悲恋の歌か

休校で会えないままのひとつきを埋めるよすがもなく転動す  
「お一人が三分以内」の指示どおり薄味にする離任挨拶  
わたくしを知らないはずの校長がさざりと言いいぬ「尽力された」  
ICTスキルを持たぬ教員はコロナの篩ふるいに落とされてゆく

グレン・グールド 今井 智美 福岡

春たけて野辺一面のほとけのざ仏が坐すそのいづれにも  
砂浜をわれと並びて散歩するカラスが一羽カントを気取り  
過ぎし日ははるかに遠く冬晴れの空の高みにカイトがひかる  
軽やかに朝の光を踏みながらランナー駆け行く海沿ひの道  
音もなく人と世界が壊れゆくこの春の日に聴くグレン・グールド

ゆくらゆくら 印出 美由紀 神奈川

友人はたつたの一人、棺に寄りピースの青箱一つを入れぬ  
酸素ポンペをこの世の苞のごと曳きしひとの遺骨の濃緑こみどりの斑  
自肅下の辻明るませ披露目屋がぶらぶらクラリネットひびかず  
春風に大王松の葉の群が大船のゆくらゆくらに撓む  
コンクリの小さき矩形に棲む鯉の跳ねる刹那に翻る空

常 温 前中 映 東京

冷えしるき朝の自販機「常温」を保つためにも電力は要る  
いただいた酒はかばんに押し込んで次の仕事に行く松の内  
起点なく終点もなく生きてゐる山手線はくるしさうだな  
二十世紀は戦争の世紀「ほろほろとバウムクーヘン指に崩すも  
放たれて冬の堤をゆく犬の白いむく毛にさはりたかつた

海を向く 荒川 ゆみ子 東京

仮設より人々町に帰り来て新しき家みな海を向く

三陸の人たちはとても偉いねと従兄弟に言ひて、沈黙返る

北に発つ仲間になれずもくれんは傷んだ羽をほとほと落とせり

緊急事態宣言近しと聞こえたりパスタの湯切りしてゐる時に

方舟に乗つたふたりで考へる夕餉の献だてマスクの調達

南半球の夏 石田 信 夫\*鳥 取

手のひらに南半球の夏が乗る新物かぼちゃは光たたえて

婀娜やかな白き肌はだえの一枚を剥ぎて白菜料理にむかう

菜の花の黄のあふれたる道辺みちのべに平山みきが隠れているよ

花ぐわし桜は咲きしているものを桜通りはいずこも無言しじま

不気味なる喪黒福造めく黒のワゴン車に即道譲りたり

中洲では 永田 恵 美 福岡

すれ違ふ少女の白いマスク越しにハミング聞こえ街はやさしい

春の街海に変はりて少女らは色とりどりの魚になりぬ



北の人と空の深さをかたりたし四月の空の青の静まり

教室の壁に貼られた元素記号はひそかに何かをたくらんでゐる

中洲では二千軒潰れたさうですよ美容師が言ふコロナ禍の四月

新 役 員 尾 端 桜 子 香 川

自治会の新役員が回り来ぬ何もわからん六十八歳

換気口に耳を澄ませば雛の声今年もわが家は雀のお宿

マスクより手洗ひ大事と孫の言ふ何がほんとか I don't know.

人類のグローバル化の落とし穴「コロナウイルス」さらに進化する

「唯ちゃん」に奪はれポッキー三cm箱は離さぬ奏汰かなた一歳

ラ ッ パ 水 仙 新 明 恭 子\*香 川

ボウル持ち腰をふりふりホイップしカステラ作る十七歳は

若草の夫に供えんわが庭で演歌をうたうラッパ水仙を

蔓からみからむカラスノエンドウが草刈鎌の自由を阻止す

十二人集いて玉葱すりおろしこねくり作る蜚蠊団子

「靱播はしとかないかん」と隣りの主人 癌の治療を三月遅らす

子 山 羊 丸 山 克 介 鹿 見 鳥

話せず列を乱さず並びをりトイレットペーパー一つ買ふため

赤土の広がる島の春深し砂糖黍揺らし風吹き渡る

子山羊また大根畑に入り込み上目遣ひにその葉喰ひゐる

「そこは駄目」媪の声に大根の葉を喰ふ子山羊隣の葉を喰ふ

思春期を珊瑚の海見て暮したる故へそ曲がりにならず生きを作り